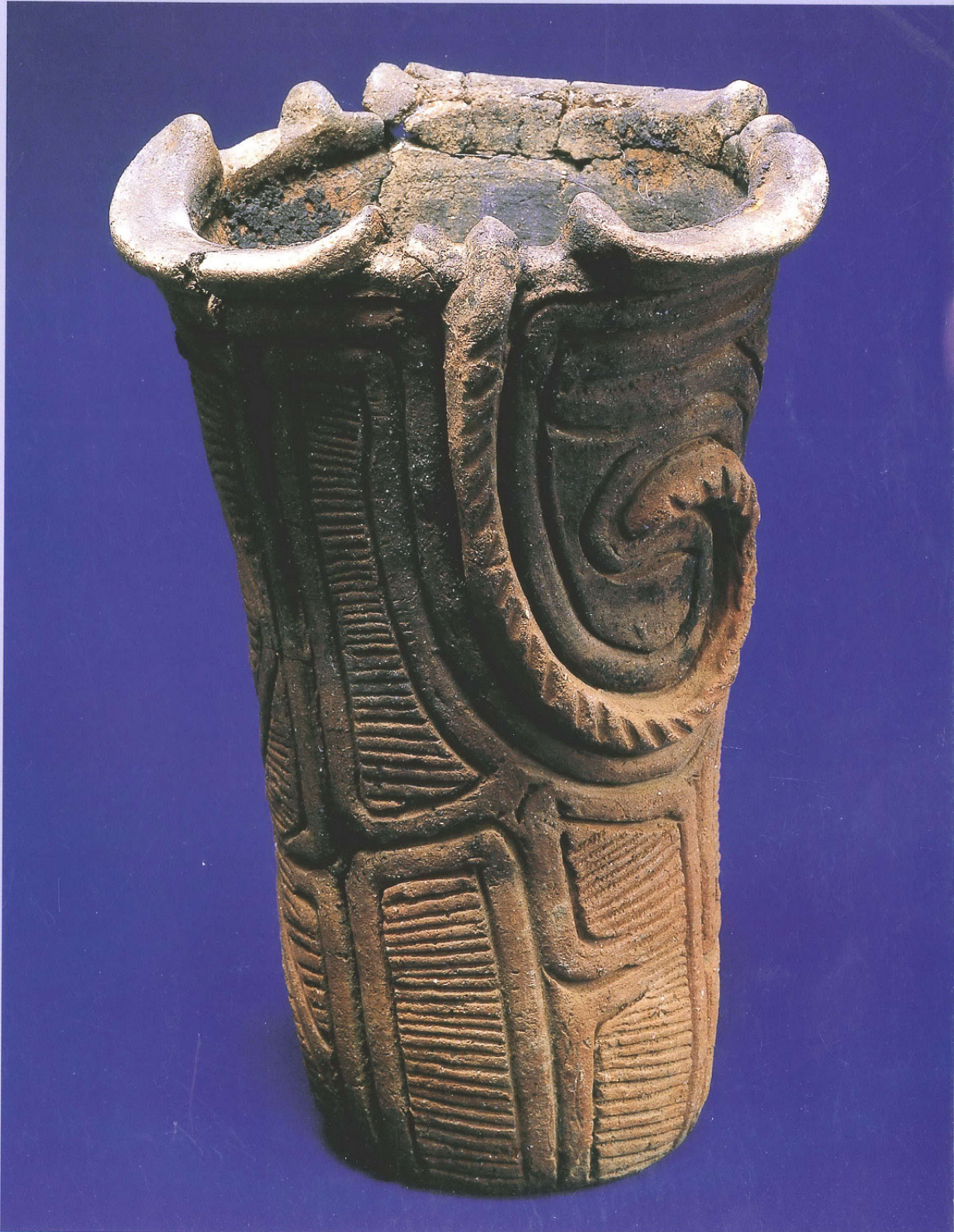


砂原遺跡Ⅱ

SUNAHARA

緊急発掘調査報告書



例 言

- 1 本書は、平成10年7月23日～8月20日に実施された松本市内田に所在する砂原遺跡第2次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は緊急地方道整備事業・主要地方道松本塩尻線拡幅工事に伴う緊急発掘調査であり、長野県松本建設事務所より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆はⅢ-3-(2) 石器を太田圭郁が、その他を竹原 学が行った。
- 4 本調査および本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。
遺物洗浄・保存処理・復原 五十嵐周子、内澤紀代子、洞沢文江、百瀬二三子
遺構測量 中山自子、横山真理
遺構図整理 石合英子
遺物実測・拓影 五十嵐周子、加島泰祐、洞沢文江、堀 久士、米久保治郎
トレース 太田圭郁、桜井 了、林 和子、洞沢文江、米久保治郎
写真撮影 横山和明（現場写真）、宮嶋洋一（遺物写真）
編 集 竹原 学
- 5 本書で使用した遺構の略称は以下の通りである。
竪穴住居址→住、溝状遺構→溝、土坑→土、ピット→P
- 6 図中で用いた方位記号は真北を指している。
- 7 本書作成にあたり、以下の方々よりご教示をいただいた。記して感謝申し上げる。
島田哲男、野村一寿、村田昇司、森 義直、横山和明
- 8 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。

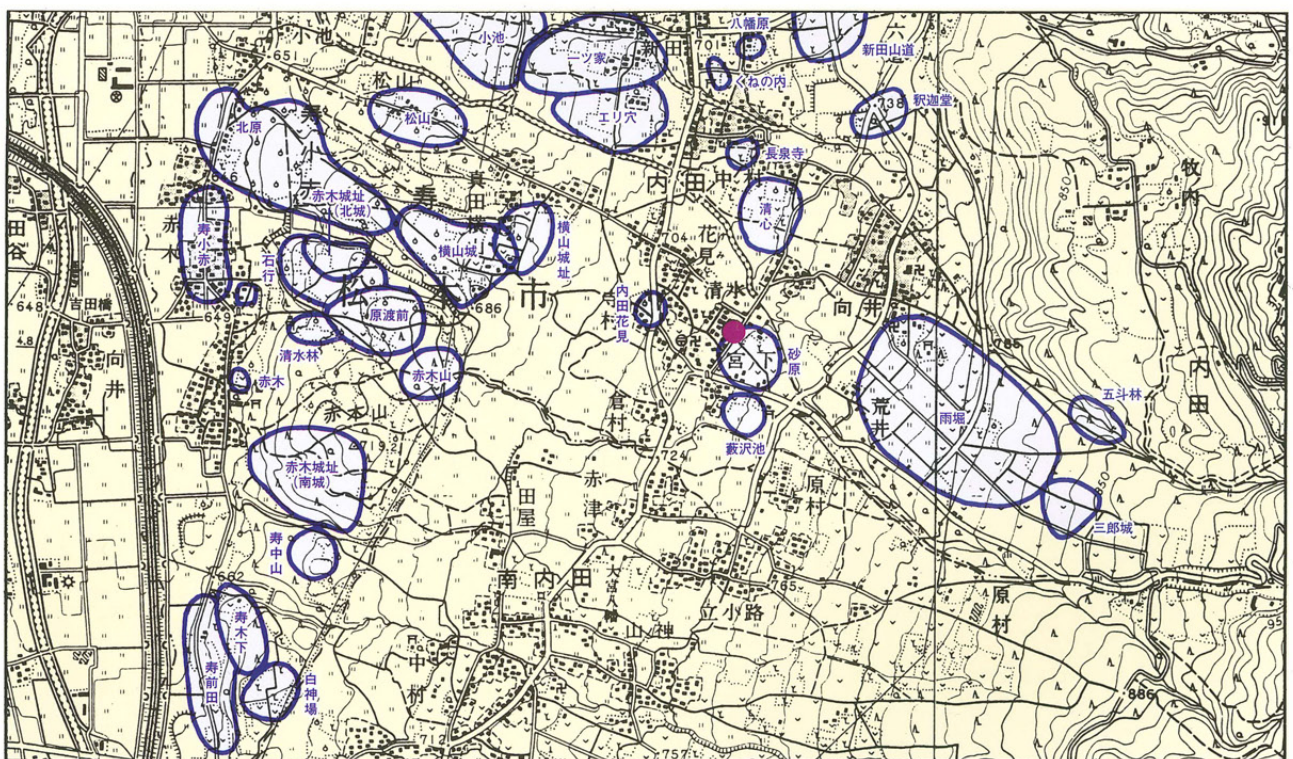


図1 調査地の位置(●印)と周辺遺跡

S=1:25,000

1 調査の経緯

1. 調査に至る経過

砂原遺跡は、松本市南東部の内田地区に位置し、昭和61年に県営圃場整備事業に伴い発掘調査が実施されている。平成10年、遺跡内を通過する主要地方道松本塩尻線の拡幅工事が計画された。そのため、松本市教育委員会では事業主体である長野県松本建設事務所と遺跡の保護について協議を行い、まず当該地における遺構・遺物の有無について松本市教育委員会が試掘調査を行い、その所見から遺跡の保護措置について再協議を行うこととした。試掘調査は同年5月に行われ、事業予定地内に縄紋時代をはじめとする遺構・遺物が存在することが明らかとなった。この結果を受けて関係者による再協議を行った結果、事前に松本市教育委員会が緊急発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図った後、道路拡幅工事に着手することとなった。

2. 調査体制

調査団長 松本市教育長 守屋立秋（～H11.6.30）、舟田智理（H10.7.1～10.15）、竹淵公章（H10.11.1～）

調査担当者 横山和明、村田昇司

調査員 太田守夫、松尾明恵

協力者 荒井留美子、五十嵐周子、石合英子、白井秀明、内澤紀代子、上条信彦、窪田瑞恵、酒井 良、三戸智史、鈴木幸子、高橋登喜雄、竹平悦子、寺島 実、中山自子、畑 茂、林 和子、洞沢文江、前沢保亀、丸山喜和子、御子柴長寿、甕 国成、百瀬二三子、横山真理

事務局 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長、～H11.3）、松井敬治（文化財担当係長、H11.4～）、久保田 剛、近藤 潔（～H11.3）、武井義正（H11.4～）、酒井まゆみ（旧姓上條）

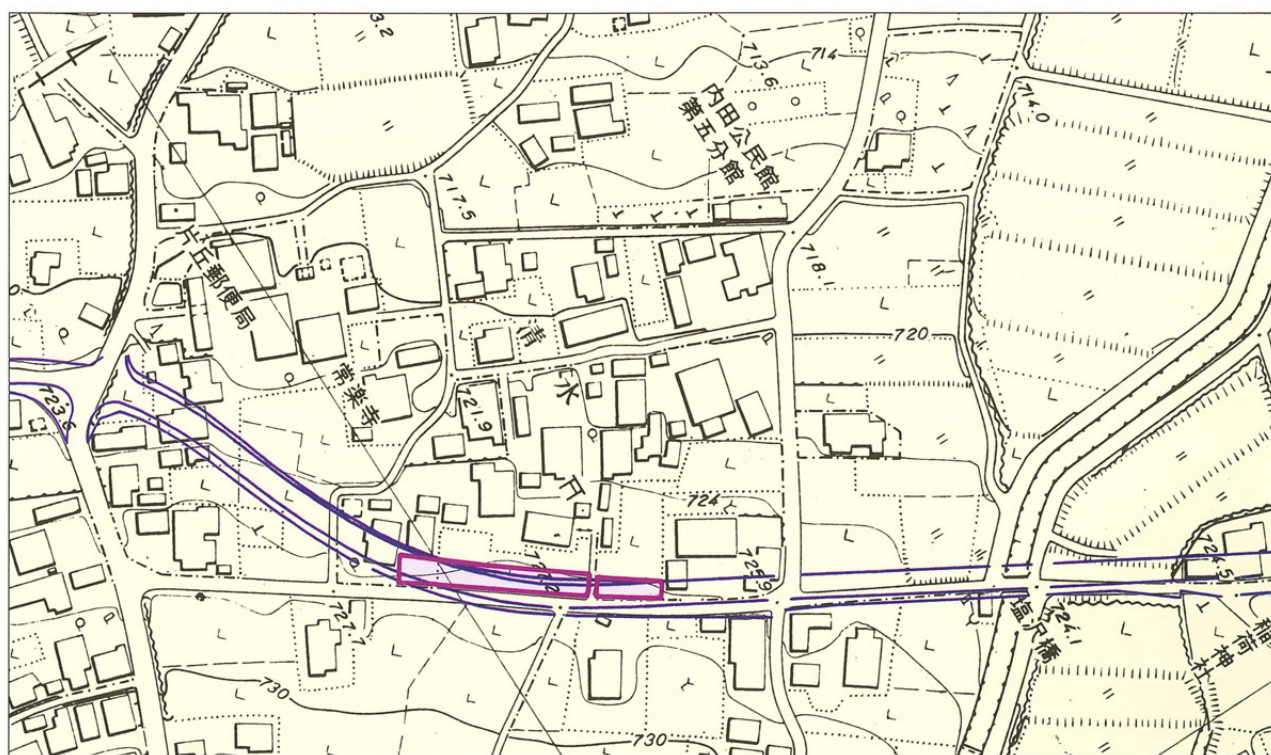


図2 調査区的位置

S=1:2,500

II 遺跡の環境

砂原遺跡は、松本盆地の東縁部、筑摩山地西麓を流下する塩沢川左岸の扇状地扇央付近に位置している。遺跡の標高は710～730mを測り、縄紋時代を主体とする遺跡とされてきた。しかし、昭和61年に塩沢川沿いにおいて実施された県営圃場整備事業に伴う発掘調査（第1次調査）では、何ら遺構・遺物は検出されず、内田集落内の畑より縄紋土器が出土したという情報以外に遺跡の実態は不明であった。

砂原遺跡を含む塩沢川流域は松本平でも有数の遺跡地帯であることが知られている。そのなかでも最も主体となる縄紋時代遺跡について挙げると、まず右岸では本遺跡の東方には早期の五斗林遺跡、中期の大集落である雨堀遺跡等があり、西方すなわち下流域にはやはり中期の大集落である一ツ家・小池遺跡、2,500点を超す土製耳飾の大量出土や人面付土版等、松本平有数の後・晩期集落遺跡であるエリ穴遺跡が存在している。塩沢川左岸では下流側の赤木山丘陵周辺に早期の北原遺跡、晩期水式の良好な資料を出土した石行遺跡や弥生時代中期初頭の横山城遺跡などがある。

III 調査の結果

1. 調査の概要

調査方法 試掘調査の結果から道路拡幅事業予定地のうち幅5～8m・南北70mの範囲について発掘調査が必要と判断した。調査行程は重機による表土除去作業→人力による遺構の検出・掘り下げ・記録作業→重機による埋め戻し作業、である。測量記録は、調査区が北方位と斜交し狭長なため、便宜的に任意の方向に3m方眼を設定して基準とした。この基準軸と真北との角度差は東方に39度7分55秒を数える。

基本土層 標準的な堆積土層は第1層：耕作土（層厚30～40cm）、第2層：黒褐色土（層厚20cm内外）、第3層：黄褐色二次堆積ローム層で、第2層が遺物包含層、第3層が地山層である。遺構の検出は基本的に第3層上面で行った。

調査期間 平成10年7月23日～8月20日

調査面積 380㎡

検出遺構 竪穴住居址 3棟（縄紋時代中期）
土坑 112基（縄紋時代中期・中世）
ピット 56基（縄紋時代中期・中世）
溝状遺構 1条（中世）
ロームマウンド 1基（縄紋時代）

出土遺物 土器（縄紋時代中期中葉・後葉）
陶磁器（中世、瀬戸美濃系陶器・青磁）
石器（縄紋時代中期）
金属製品（中世、鉄器・銅製品）

作業風景



調査団





図3 遺構配置

2. 遺 構

(1) 竪穴住居址 (図4)

第1号住居址 調査区北部で検出、東側1/2を調査した。直径4.0m・深さ27cm、円形の住居址で、黄褐色二次堆積ローム層中に構築。炉は調査範囲には見当たらない。床面上には楕円形ピット2基があるが、恐らく本址と切り合う土坑であろう。遺物は少ない。本址は土器から見て縄紋時代中期末葉の遺構であろう。

第2号住居址 調査区中部にある。南北径4.2mを測る円形竪穴住居址で西側1/2を調査した。覆土は暗褐色土が厚く堆積し、礫が多く見られる。床面は深さ最大55cmを測る。炉は中央の浅い方形ピットが該当しようが、焼土は見られない。ピットのうちP1・3・5・6が主柱穴となろう。遺物は一括品はないが、覆土中より土器片と石器が多く出土。本址の帰属時期は土器の大半を占める縄紋時代中期中葉に求められよう。

第3号住居址 2住に大半を切られる。南壁下床面からは4基のピットが検出されたが、位置・深さからP2が柱穴と考えられる。遺物は少ないが、P2脇覆土中より小形の完形深鉢が横倒して出土した。遺構の帰属時期は出土土器から見て縄紋時代中期中葉であろう。

(2) 土 坑 (図4・5)

総数112基が検出されたが、形態や断面形、覆土の特徴などから数種に分別が可能である。

円形土坑 直径0.7~1.0m・深さ40~50cmを測り、壁は直状(土3・62・78等)、あるいは袋状(土5・16等)を呈する。また、同形同大で掘り込みが浅いものもある(土4・6・7・28・46・52・63)。遺構の多くは北半部に分布し、縄紋時代中期のものと考えられる。調査区南寄りの土62・78等は中世のものであろう。

方形土坑 垂直な壁と平坦な底面を有する(土69・74・79・81・82・84~86・100)。長辺2m以上のものが主体である。土74では覆土中に礫が見られる。遺物は陶磁器片、鉄器、銭等が伴い、帰属時期は中世と考えられる。分布は調査区南部に集中し、同時期のピット群と重なる。また各遺構の軸方位が南北ではなく、内田集落内を通過する調査区脇の道路(県道)と平行に整然と配置される点に注意される。

その他 1基のみの確認だが覆土に砂やシルトが薄く互層をなし、円形・すり鉢状を呈するものがある(土55)。直径2.5m・深さ0.7mを測り、中世遺構の集中地点に位置する。おそらく水溜め施設と考えられる。

(3) ピット (図3)

中世遺構の集中する調査区南部、土79の北側にはまとまった分布が認められ、形態・規模も直径20~40cm内外と近似しており、掘立柱建物址等、中世の何らかの構造物を構成していた可能性が高い。

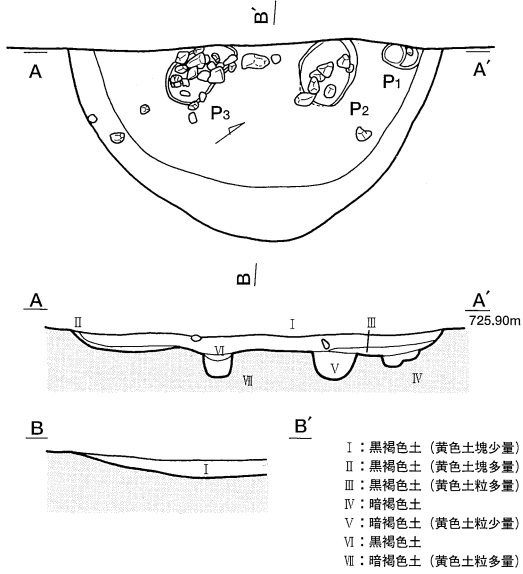
(4) 溝状遺構 (図3・5)

調査区中部、2住の北側において、北北西に流下する溝状遺構が検出された。検出面での最大幅は10m近くあり、暗褐色土、砂礫等が堆積していた。調査区西壁で確認したところ、幅3m・深さ40~50cm内外の溝状遺構が2条並走していることが判明、最終堆積物である砂礫が両者を覆っている。堆積土内より出土した遺物には縄紋土器片の他陶器片があり、本址の形成時期は中世と考えられる。

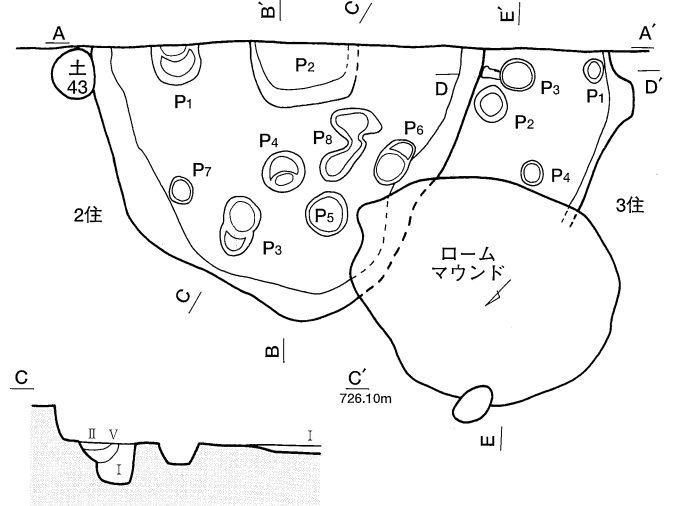
(5) ロームマウンド (図4)

調査区中部、2・3住を切って存在する。長径2.8m・短径2.3mを測る楕円形を呈し、断面形は深さ1.0mの半球状を呈する。土層は全体に黒色土が堆積、2・3住寄りに黄褐色ロームが載っている。

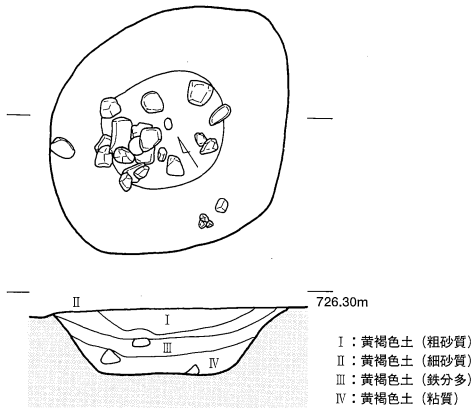
第1号住居址



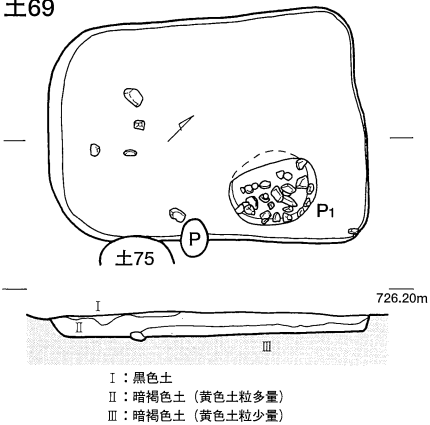
第2・3号住居址



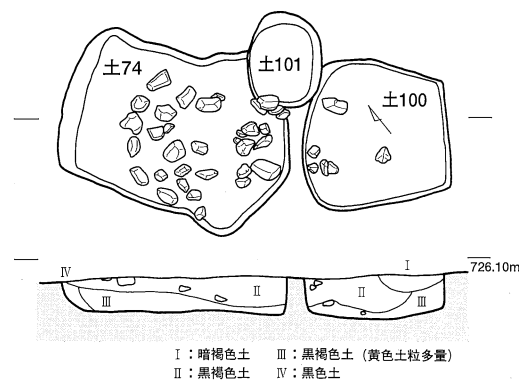
±55



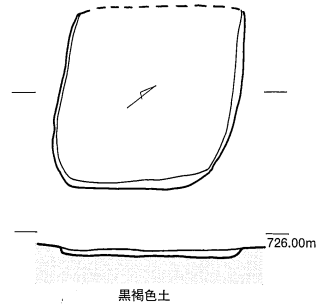
±69



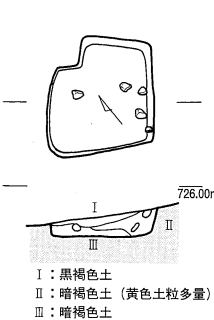
±74・100・101



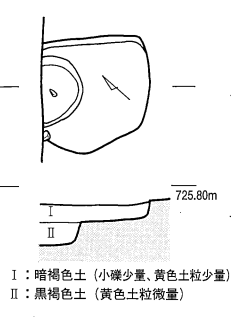
±79



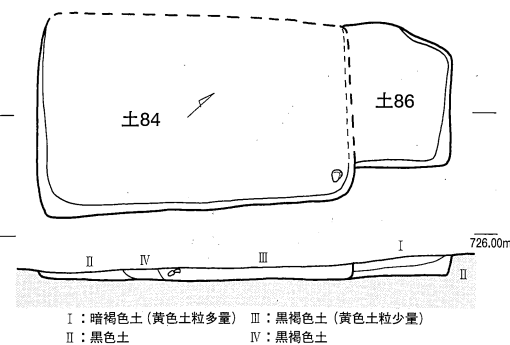
±81



±82



±84・86



±85

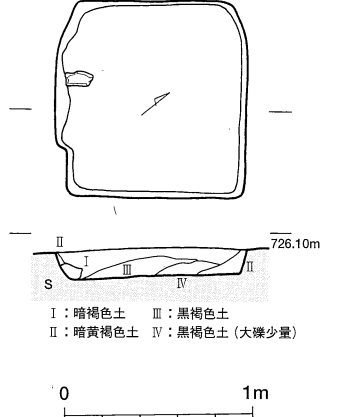
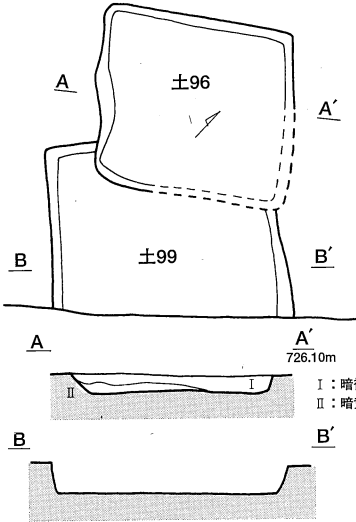
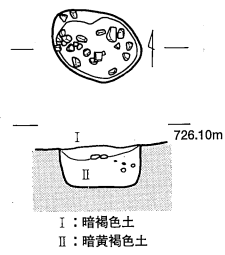


図4 検出遺構(1)

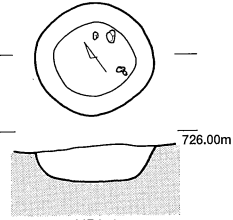
±96・99



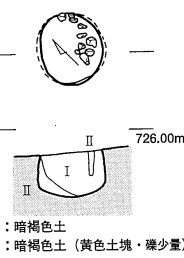
±3



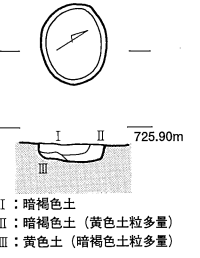
±4



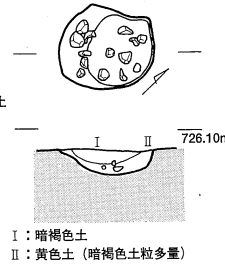
±5



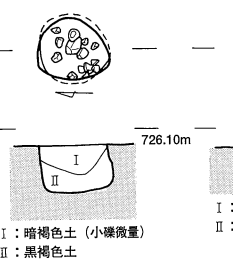
±6



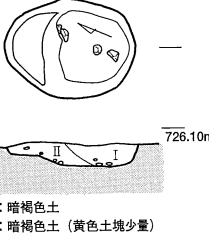
±7



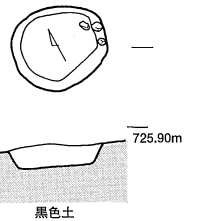
±16



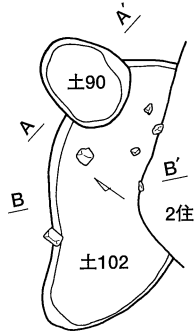
±28



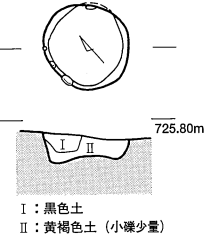
±46



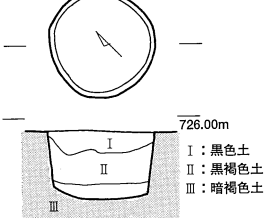
±90・102



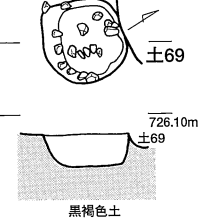
±52



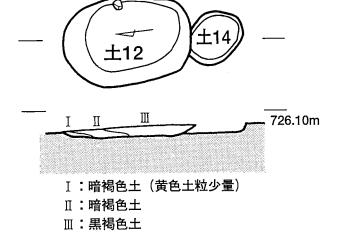
±62



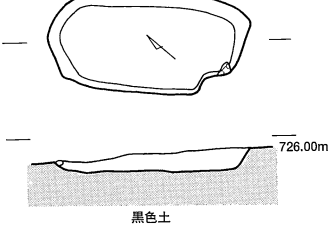
±78



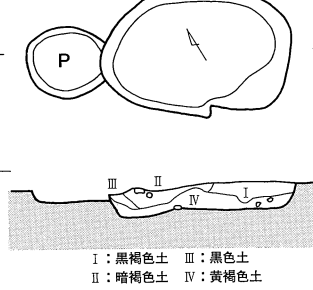
±12・14



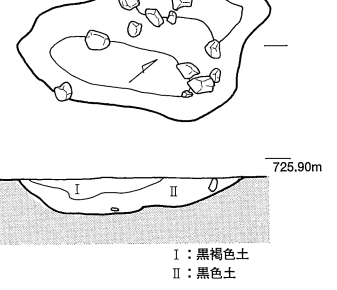
±56



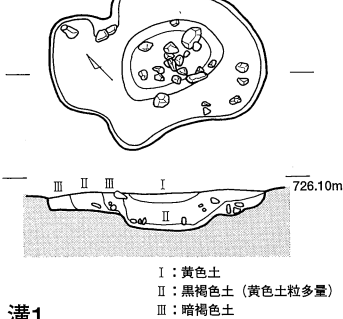
±88



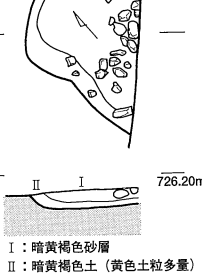
±57



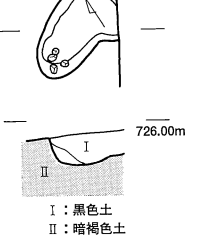
±73



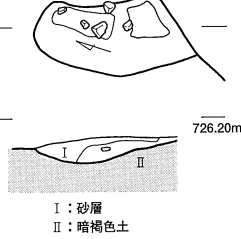
±41



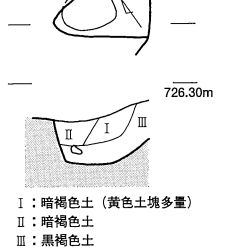
±48



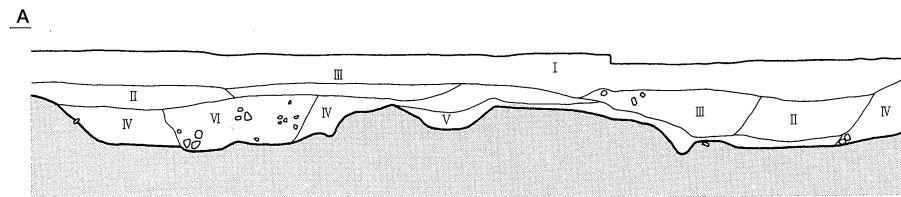
±49



±10



溝1



A' 726.30m

- I : 耕作土
- II : 暗褐色土
- III : 暗褐色土 (小礫多量)
- IV : 黑褐色土
- V : 茶褐色土
- VI : 砂礫層



図5 検出遺構(2)

2. 遺物

(1) 土器・陶磁器 (図6・7)

① 縄紋時代の土器

住居址を中心に出土し、4点を実測、46点を拓影で提示し得た。

第1号住居址 (1~8) 8点を提示した。いずれも中期末葉の深鉢片で、1・2・3・5・6は崩れた唐草紋の施されるもの、4・7は縄紋施紋のものである。8は薄手で瘤状の隆帯、鋭く深い沈線が施される。

第2号住居址 (9~32) 24点を提示したが全形の判明するものはない。ほとんどが中期中葉藤内式期のものである。器形には浅鉢 (11・15) と深鉢が見られる。深鉢の口縁部はくの字状に内屈するもの (12・13)、内湾するもの (9・14・17)、直立するもの (16) 等がある。施紋は楕円区画内にキャタピラ紋等を施すもの (10・26・30)、区画内に斜走沈線を充填するもの (9・32)、縄紋を多用するもの (17・20・21・22・25・28) 等がある。29は緻密な胎土と薄手な作りで他と区別されるもので、隆帯上に爪形紋が密に施され、刺突列点紋を伴う沈線紋が伴う。おそらく東海系の土器と考えられ、胎土から見て搬入品であろう。

第3号住居址 (33~38) 2住出土品とほぼ同時期のもの。深鉢6点を提示した。33は唯一完形品で、斜走沈線を充填したパネル紋を施す。3単位の波状口縁のうち2単位には隆帯による垂下紋が伴う。

その他の遺構 (39~50) 土坑・溝からの出土品が少数ある。時期的には中期初頭 (45~47)、中期中葉 (39・43・44・48~50)、中期末葉 (40・41・42) のものが見られる。

② 中世の陶磁器

土坑を中心に計11点 (7個体分) の小破片が出土した (写真図版3)。器種・器形に東海系の捏鉢 (51、溝1)、常滑産の三筋壺 (52~54、土57)、常滑産? の鉄釉壺 (55~57、土84)、古瀬戸系陶器の鉄釉碗 (58、土85)・灰釉丸碗 (60、土69)・折縁深皿 (59、土84)、無紋の青磁碗 (61、土41) 等がある。捏鉢・三筋壺・青磁碗は13世紀代のものと考えられる。灰釉丸碗は15世紀代のものであろうか。

(2) 石器 (図8)

石器群の概要

本調査では主として縄紋時代に帰属すると考えられる住居址、土坑等より、総点数140点総重量8228.32gを測る石器群が出土した。ここでは調査区北部に位置する縄紋時代中期集落を中心に概観しておきたい。

遺構種毎の平均点数を見てみると、住居址は調査区外にかかっていたり、切り合いにより完掘し得なかった為25点 (1住9点、2住57点、3住9点) となるが、本来はその数倍程度が想定される。土坑は中世を含

表1 黒耀岩母岩別資料一覧

母岩番号	構成個体番号	分布遺構	母岩番号	構成個体番号	分布遺構
黒耀岩1	002,073,111,121	1住、土坑69、溝1	黒耀岩7	032,117,119	2住、溝1
黒耀岩2	005,092	1住、土坑28	黒耀岩8	070,113	3住、溝1
黒耀岩3	012,017,061	2住	黒耀岩9	072,087,096	土坑10、土坑56、土坑69
黒耀岩4	014,030,118,120,126	2住、溝1	単独資料	001,004,010,011,013,022,028,031,033,037,038,039,040,041,047,048,060,065,080,081,082,083,084,085,086,088,091,098,099,105,106,107,110,112,114,123,124,131,133,135,138,139	1住、2住、3住、土坑10、土坑28、土坑56、溝1、検出面
黒耀岩5a	015,023,034,035,043,044,045,046,062,068,115,125	2住、3住、溝1			
黒耀岩5b	016,018,019,021,036,049,059,063,069,071,077,097,116,127,140	2住、3住、土坑4、土坑56、溝1			
黒耀岩5c	029,058,066,067,132,136	2住、3住、検出面			
黒耀岩6	020,064,128,134	2住、溝1、検出面			

表2 遺構単位石器組成

出土遺構\器種	MS	C	F	BC	BF	Ch	FP	Sc	RF	MF	FA	PI	P II	PC	Ws	P	PT	計	器種/出土遺構
第1号住居址	1		2	1					1				1			2	1	9	第1号住居址
第2号住居址	1	7	14		2		3	1	7	11	2	1		1	1	4	2	57	第2号住居址
第3号住居址		2	3	1	1					2								9	第3号住居址
第003号土坑												1						1	第003号土坑
第004号土坑										1								1	第004号土坑
第005号土坑			1															1	第005号土坑
第010号土坑	5	2	2						1									10	第010号土坑
第011号土坑																	1	1	第011号土坑
第016号土坑														1				1	第016号土坑
第028号土坑			1	1														2	第028号土坑
第039号土坑									1								1	2	第039号土坑
第041号土坑			1															1	第041号土坑
第056号土坑				1					1	2								4	第056号土坑
第069号土坑			1	1								1				1		4	第069号土坑
第073号土坑																	1	1	第073号土坑
第100号土坑									1								1	2	第100号土坑
第21号ピット											1							1	第21号ピット
第1号溝状遺構	1	4	8	3	1	1			2	4	3							27	第1号溝状遺構
検出面		1	1	2			1			1								6	検出面
計	8	16	34	10	4	1	4	1	14	21	6	3	1	1	2	7	7	140	計

略号 MS:原石、C:石核、F:剥片、BC:楔状石核、BF:楔状剥片、Ch:碎片、FP:鏃形石器、Sc:スクレイパー状石器、RF:二次加工のある剥片、MF:微細剥離痕のある剥片、FA:打製斧形石器、PI:礫石器Ⅰ類(凸面敲打)、PⅡ:礫石器Ⅱ類(凸面研磨)、PC:礫石器複合、Ws:砥石状石器、P:自然礫、PT:礫片

めた13基より総数31点が出土し、2.4点となる。器種としては臨機的な石器か、もしくは石核、剥片等素材獲得段階のものが多くいようである。中世の土坑より平均を上回る点数が出土していることから、調査区南半部にまで集落の範囲が広がる可能性もある。

石器群全体での石材組成では黒耀岩が73%を占め、次いで頁岩、凝灰岩、硬砂岩、砂岩、安山岩等がそれぞれ数%認められた。接合可能面を有する石器については母岩識別を実施したが、非黒耀岩製石器群ではそのほとんどが単独個体であった。それに対し黒耀岩製石器群では、接合資料は確認し得なかったものの同一母岩資料が9例認められた。それらの分布から2住-3住間に同一母岩関係が多いのに対し、1住が孤立している状況が伺える。2住及び3住は切り合い関係にある為当然ともいえるが、1住-2住・3住間に同一母岩関係が認められなかったことは、土器群から得られた時期差に対応するものとも考えられる。

(3) 金属製品 (図7)

中世の土坑より鉄器5点、銅製品2点、合計7点が出土した。1・5・6は鉄釘、7は刀子の刃部破片である。2は棒状の不明品。銅製品のうち、3は環状の製品で、外径1.6cmを測る。断面は円形を呈する。4は銭で、表面の荒れが著しいため銭銘の判読は困難だが、聖宗元寶と推定される。

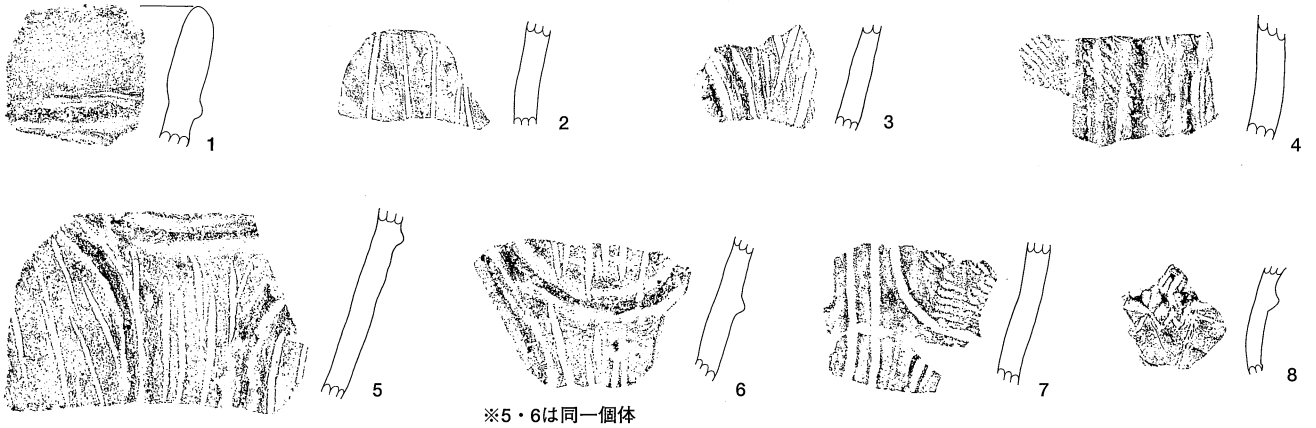
Ⅳ まとめ

今回の調査は実質的には砂原遺跡初の本格的な発掘調査となり、以下の点が明らかとなった。

第一に縄紋時代中期の集落址が捉えられたことで、特に初頭の遺物、および中葉と末葉の住居址を検出したことにより中期全般にわたる息の長い集落であろうことが窺えた。第二に中世の集落を確認したことである。この2時期の集落の構造や広がりといった具体的様相の解明は今後の調査に委ねられるが、これまで調査の進んでいる塩沢側右岸の諸遺跡とは対照的に、これまで実態がほとんど不明であった本遺跡をはじめとする左岸域の遺跡の発掘調査として、一定の成果を収めることができた。

最後に、調査に際してお世話になった地元ならびに関係者の方々に謝意を表してしめくりとしたい。

第1号住居址



第2号住居址

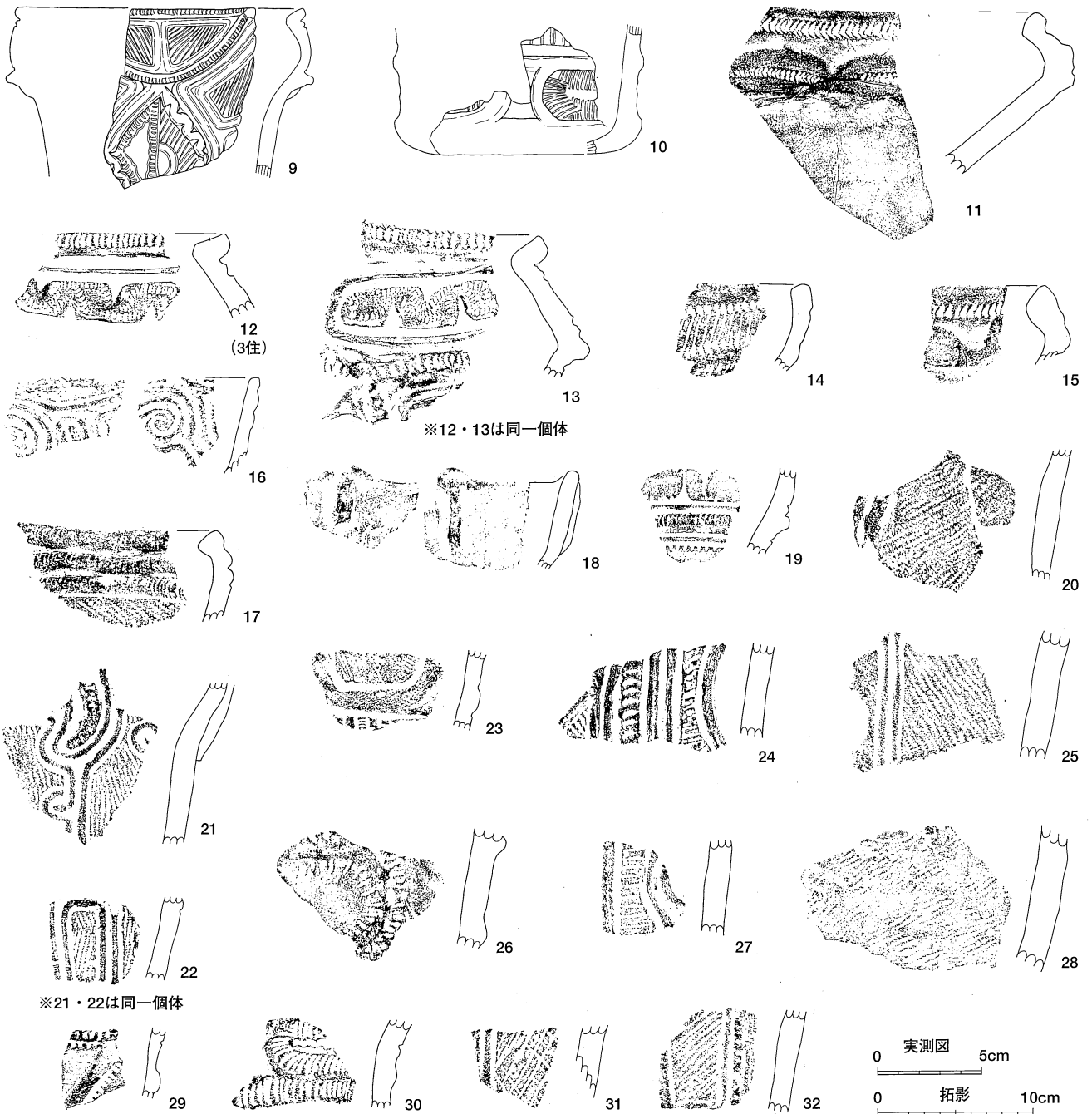
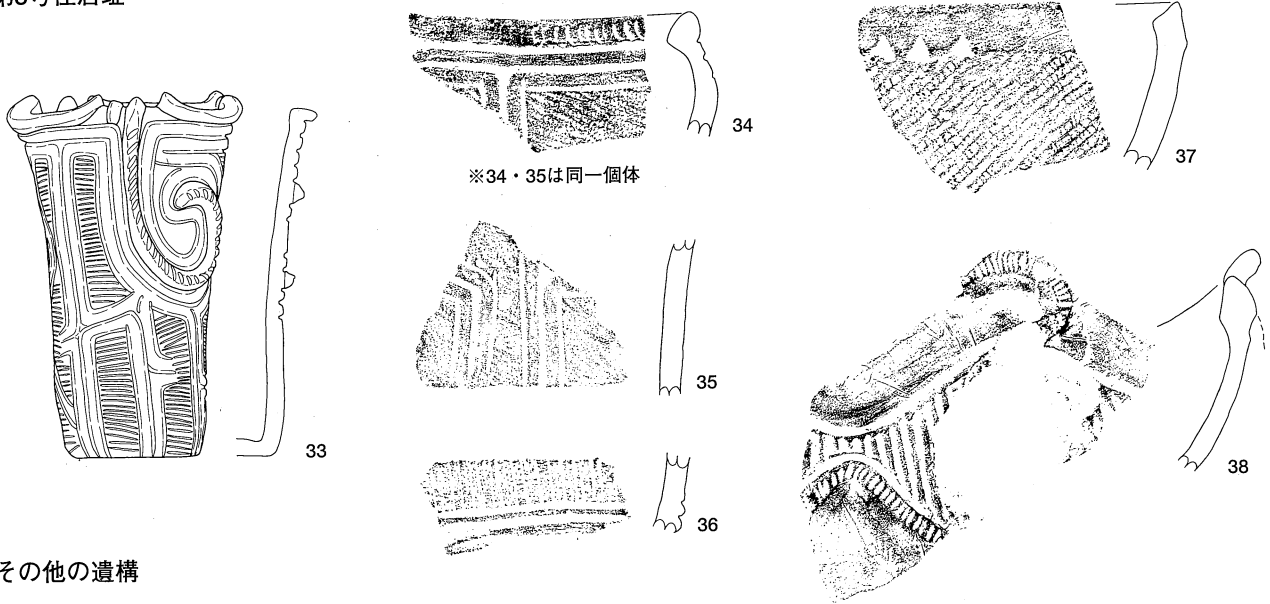
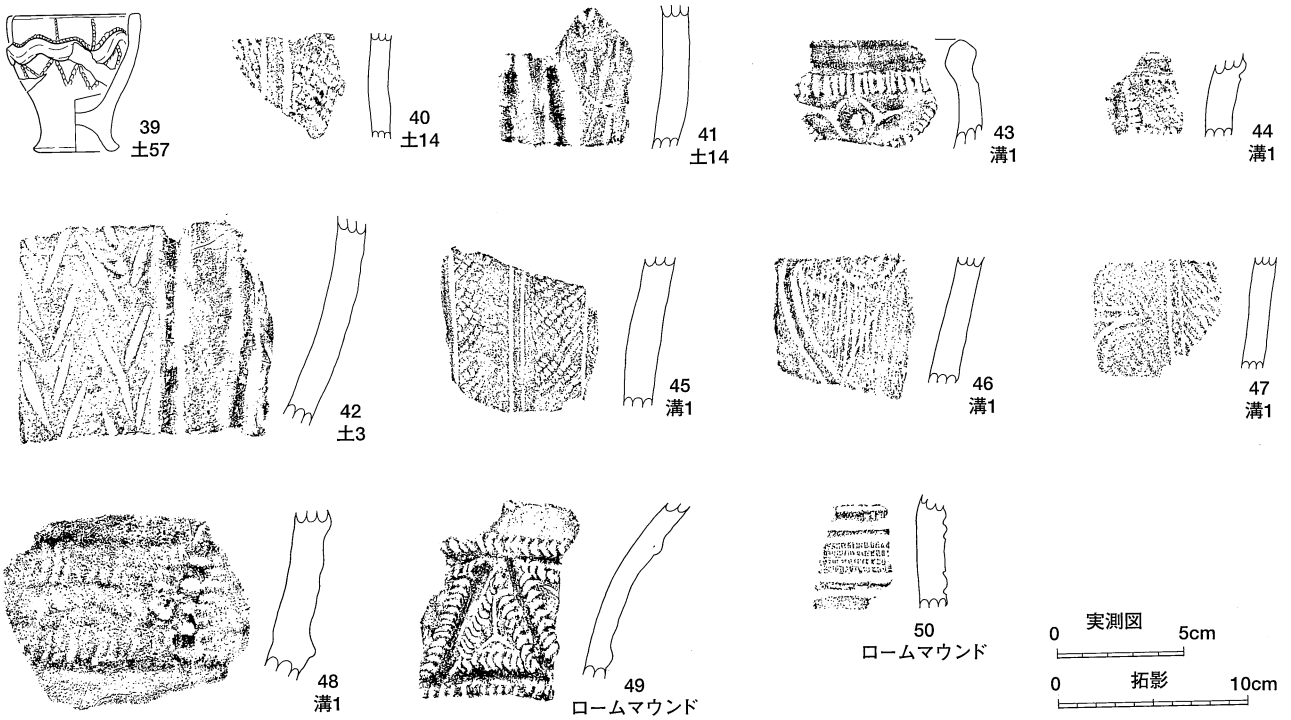


図6 出土土器 (1)

第3号住居址



その他の遺構



金属製品

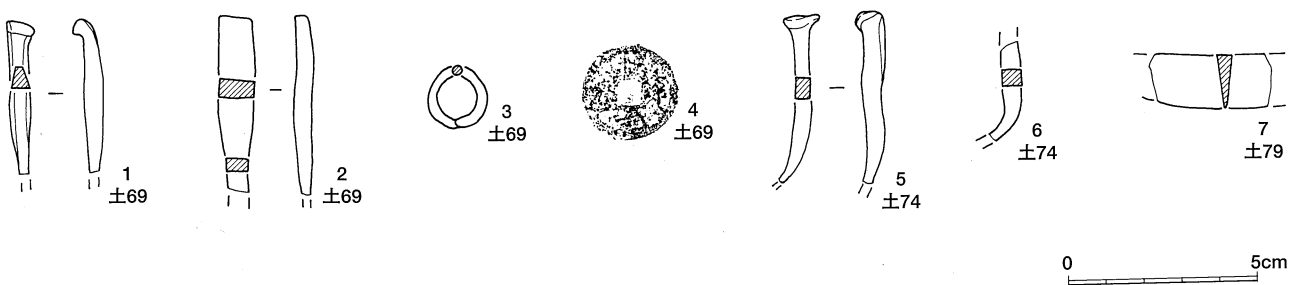


図7 出土土器(2)・金属製品

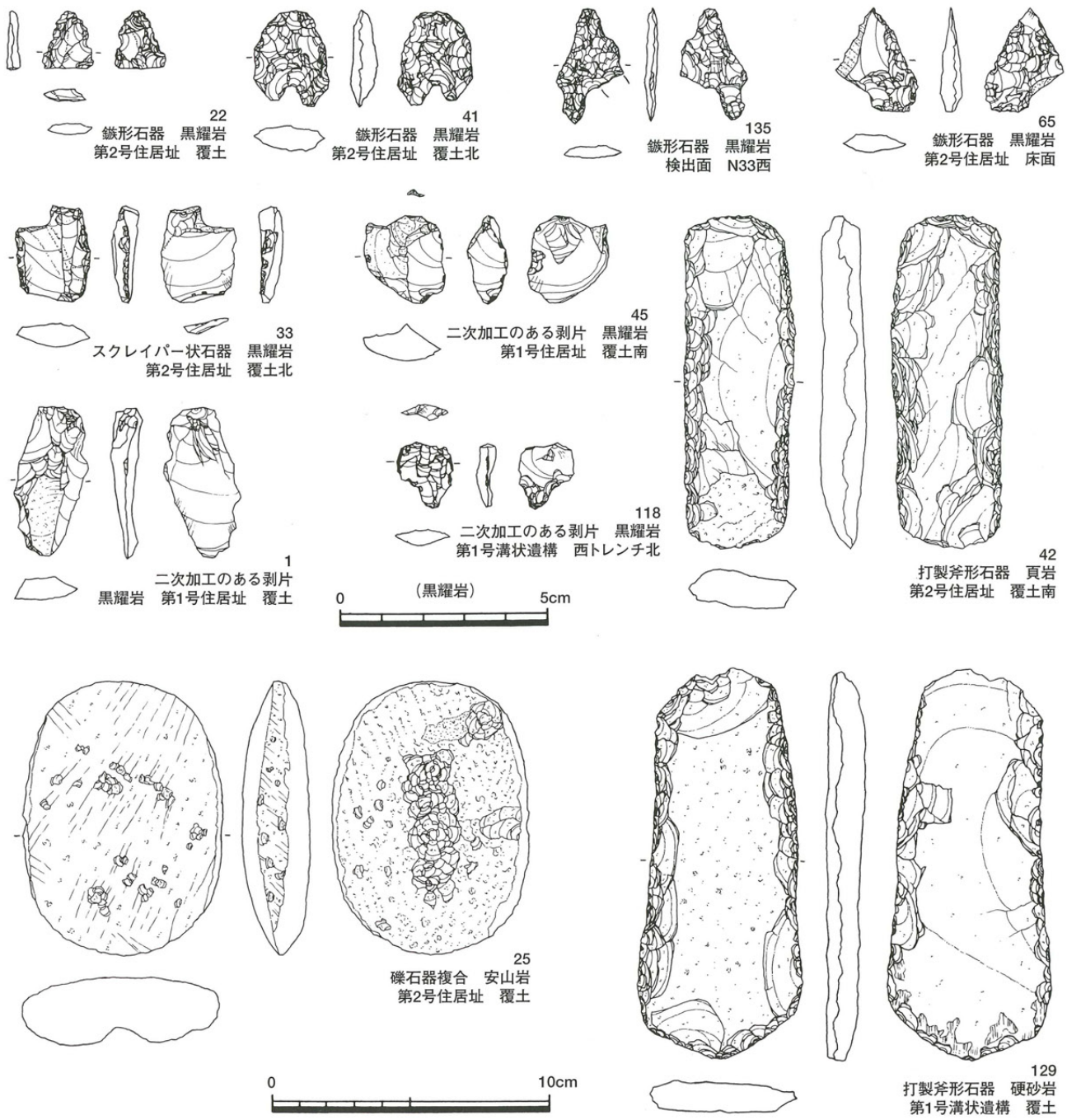


図8 出土石器

表3 実測図掲載個体属性一覧

単位 最大長・最大幅・最大厚:mm、重量:g、剥離角:度

No.	出土遺構1	出土遺構2	石材	母岩	器種	素材	二次加工	最大長	最大幅	最大厚	重量	剥離角	打面	末端	礫面
1	第1号住居址	覆土	黒耀岩	単独	RF	通常	通常	36.8	19.2	8.0	3.1	88	単剥離面	ヒンヂ	背中
22	第2号住居址	覆土	黒耀岩	単独	FP	不明	押圧	14.6	12.7	3.6	0.5	—	—	—	なし
25	第2号住居址	覆土	安山岩	単独	PC	不明	研磨・敲打	67.0	49.4	17.0	194.8	—	—	—	なし
33	第2号住居址	覆土北	黒耀岩	単独	Sc	通常	通常・微細	24.1	18.6	6.7	2.2	107	礫面	古折	なし
41	第2号住居址	覆土北	黒耀岩	単独	FP	不明	押圧	22.2	18.5	7.4	2.2	—	—	—	なし
42	第2号住居址	覆土南	頁岩	単独	FA	通常	通常・両極	81.3	28.1	11.7	113.9	—	二次	二次	背小
45	第2号住居址	覆土南	黒耀岩	黒耀岩5a	RF	通常	通常・押圧	22.0	20.3	10.1	2.6	110	礫面	ヒンヂ	背中
65	第2号住居址	床面	黒耀岩	単独	FP	通常	押圧	25.7	20.5	5.7	1.8	—	二次	二次	背小
118	第1号溝状遺構	西トレンチ北	黒耀岩	黒耀岩4	RF	通常	通常・押圧	15.8	14.0	5.0	0.6	111	複剥離面	二次	なし
129	第1号溝状遺構	覆土	硬砂岩	単独	FA	通常	通常・両極	95.1	41.0	10.4	168.9	—	二次	二次	背大
135	検出面	N33西	黒耀岩	単独	FP	通常	押圧	28.0	16.6	3.3	1.1	—	二次	二次	なし

調査区全景 (南から、手前に中世の土坑群)



調査区全景 (北から、手前に溝状遺構、2・3住)



北側調査区全景 (南から、縄紋中期の土坑群、奥に1住)



第1号住居址の完掘状況



第2号住居址の遺物・礫出土状況 (西から)



第2・3号住居址、ロームマウンドの完掘状況 (南から)



第3号住居址完形土器出土状況



中世の方形土坑群 (南から)



縄紋中期の袋状土坑 (土5)



中世の特殊な土坑の土層断面 (土55、水溜め施設か?)



中世の方形土坑 (左:土74、右:土100、南から)



中世の方形土坑 (土69、東から)



第1号住居址出土縄紋土器 (中期末葉)



約 1 : 2.4

第3号住居址出土縄紋土器 (3単位の波状口縁、胴部に縦割区画紋、中期中葉)





縮尺 土器 1:3 石器(25・42・129) 1:4 他 1:2

報告書抄録・奥付

ふりがな	すなはらいせきぎんきゅうはくつちようさほうこくしよ							
書名	砂原遺跡Ⅱ緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.143							
編著者名	竹原 学、太田圭郁							
編集機関	松本市教育委員会（松本市立考古博物館）							
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号（〒390-0823 松本市大字中山3738番地1 TEL0263-86-4710）							
発行年月日	平成12年3月24日（平成11年度）							
所収遺跡	所在地	コード（市町村一遺跡番号）		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
砂原	長野県松本市内田	20202	470	36° 09'25"	137° 59'37"	19980723~19980820	380m ²	道路拡張事業
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
砂原	集落跡	縄紋	竪穴住居址	3基	土器・石器		縄紋中期と中世の集落址の一部を検出した。	
		中世	土坑・ピット	71基				
			ロームマウンド	1基				
			土坑・ピット	97基	陶磁器・鉄器・銅製品			
			溝状遺構	1条				
印刷所	株式会社総合印刷 松本市大手3丁目7番11号							